

## ヨハネによる福音書19章17-42節 「完了した御業」

### 1A 十字架における成就 17-30

1B 二人の犯罪人の間 17-22

2B 兵士のくじ引き 23-24

3B イエスの母 25-27

4B 最後の言葉 28-30

### 2A 埋葬における成就 31-42

1B 折られない骨 31-37

2B 富む者の墓 38-42

## 本文

ヨハネによる福音書 19 章、17 節から見ていきたいと思えます。午前礼拝で、前半部分、イエス様が十字架の判決をピラトから受けて、引き渡されるところまでを読みました。

四つの福音書があるわけですが、ヨハネは既に出ている三つの福音書、共観福音書とも呼ばれますが、それが既にある中で、何を伝えたかったのか？神の子としてのキリストであろうと思われれます。それは、イエスが神の子であると自己主張することではなく、むしろ父のふところの中におられた独り子としての神、父子の関係の中にあるイエス様を伝えたかったのだと思えます。その関係に、いのちがあります。父の送ってくださった御子を信じることによって、私たちがその関係の中に入ることをヨハネは願っています。

そこで、ヨハネは何度となく、父のみこころを行うことがイエス様の本命であることをずっと伝えていきます。「12:27『父よ、この時からわたしをお救いください。』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」と主は言われていました。これから見ていくところは、かつて預言者たちが神の語られたことを、イエス様によってことごとく成就していく姿です。剣をもって大祭司のしもべの耳を切り落としたペテロに対して、「18:11 剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにはいられるだろうか。」と言われました。イエス様は、神の子として、父のくださったものを受け入れ、聖書で語られた預言を成就させるためにこの場に臨んでおられます。そして、それが、私たちの罪の贖いのため、赦しのためでありました。

### 1A 十字架における成就 17-30

1B 二人の犯罪人の間 17-22

<sup>17</sup> イエスは自分で十字架を負って、「どくろの場所」と呼ばれるところに出て行かれた。そこは、ヘブル語ではゴルゴタと呼ばれている。

イエス様は、ご自分がつけられる十字架の木を自ら背負って歩かれました。十字の水平の棒の部分です。そして、イスラエルは木が貴重なので、時に木そのものにその横木を付ける場合もあります。これは、ローマが人を十字架に付ける時に行っていたことです。その木を背負って、町を巡らせ、人々の見世物にします。徹底的に辱め、むごい殺し方をして、人々にローマに齒向かうところになると強い警告を発していたのです。

しかし、これも預言の成就でした。預言といっても言葉ではなく、イサクが行ったことに現れていました。「どくろの場所」ゴルゴダは、モリヤ山の近いところにありますが、その山に向かって、イサクは父アブラハムに命じられて、全焼のささげ物のための薪を息子イサクに背負わせています(創22:6)。しかも、他の若い者たちには、一緒に来させないようにして、イサクと自分だけで上って行ったのです。イエス様は、十字架を背負いながら父の思いを考えていたことでしょう。ご自身がいけにえになることを知っていて、そのための木を担いでいると思われていたことでしょう。

十字架は、基本、徐々に窒息させ、息をする度におそろしい激痛が走るという、まさに悪夢の拷問です。両手の手首に釘が刺され、両足は一本の釘で打たれますが、そのまま磔にされていると、息ができません。息をするために、体全体を持ち上げる必要があり、その時に両足と両手に体重がかかり、釘が刺されているので、激痛が走り、筋肉が痙攣し、さらに激痛が走ります。最後は心不全になり、また酸素が回らなくなり脳に損傷を与えます。窒息かショックで死にます。

詩篇 22 篇、午前礼拝で交読した箇所ですが、そこに十字架刑でなければ説明できないような、苦しみの姿が描かれています。「22:14-18 水のように私は注ぎ出され骨はみな外れました。心はろうのように私のうちで溶けました。15 私の力は土器のかけらのように乾ききり舌は上あごに貼り付いています。死のちりの上にあなたは私を置かれます。16 犬どもが私を取り囲み悪者どもの群れが私を取り巻いて私の手足にかみついたからです。17 私は自分の骨をみな数えることができません。彼らは目を凝らし私を見ています。18 彼らは私の衣服を分け合い私の衣をくじ引きにします。」体内から大量の水分が取られて、極度の脱水症状になっている様子を描いています。骨が脱臼して、数えることができるほどだと説明している様子。それから、手足にローマ兵が釘を打っているのを、犬どもが手足に噛みついたと形容しています。そして、衣服についても預言しています。これが、紀元前 1000 年頃にダビデが歌ったのですが、ローマの十字架刑でなければ、他に説明のできないほどの詳細な様子です。

場所は、「髑髏(どくろ)の場所」とのことで、ヘブル語がゴルゴタです。ラテン語に訳された聖書には、「カルバリー」となっています。ですから、「カルバリー・チャペル」は「どくろの教会堂」と言っているようなものです。

ここはエルサレムの都のすぐそばの石切り場として使われていたところで、その岩の形が、髑髏に似ていたのかもしれませんが。いずれにしても、人の処刑場を醸し出す名前になっています。現在は、二つの場所が推定地として言われています。一つは、伝統的に聖墳墓教会です。確かにそこにローマ時代の石切り場があり、そこで巡礼に来た跡が見つかっています。そしてコンスタンチヌスの母ヘレナがここに教会を建てるように命じたところで、考古学者はこちらの可能性が高いとしています。もう一つは、英国の軍人だったゴードンのカルバリーとも呼ばれ、「園の墓」とも名付けられています。エルサレムでは、ほとんどないプロテスタントの所有している場所です。

<sup>18</sup> 彼らはその場所でイエスを十字架につけた。また、イエスを真ん中にして、こちら側とあちら側に、ほかの二人の者を一緒に十字架につけた。

ヨハネがなぜ、ここで位置関係を強調しているのでしょうか？ 私たちは、イエス様が真ん中に十字架につけられて、左右に犯罪人が付けられている光景を良く知っていますが、それはこのように、詳しく福音書の著者が記しているからですが、なぜ詳しく描いているのでしょうか？ メシアが死なれることを預言したイザヤが、こう預言したからです。「53:12 彼が自分のいのちを死に明け渡し、背いた者たちとともに数えられたからである。」背いた者たちとともに、共に数えられたのだということが、その真ん中で十字架にかけられていることによって示されています。

<sup>19</sup> ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書かれていた。<sup>20</sup> イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた。

十字架刑には、このように罪状書きを付けるのは習慣でした。ピラトははっきりと、「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」と書いています。あの東方からの賢者が、「ユダヤ人の王が生まれた」として、贈り物をもって礼拝したのとは裏腹に、その王、キリストを自分たちの手で殺してしまいました。しかし、私たちが一人一人、自分を造られた方がイエス・キリストなのに、この方を主と認めないで、踏みつけるような生き方をしてきたということについては、同罪です。

ここで大事なのは、第一に、エルサレムの都に近いところで十字架につけられていることです。第一の、エルサレムの都に近いところで、ということは、一つに律法で、罪のためのいけにえは、宿営の外で焼かれたからです。「レビ 4:11-12 その雄牛の皮とそのすべての肉、頭と足の部分、さらに内臓と汚物、すなわちその雄牛の残りすべてを、宿営の外のきよい所、すなわち灰捨て場に運び出し、薪の火で焼く。これは灰捨て場で焼かれる。」ヘブル 13 章で、それゆえにキリストは門の外で死なれたことを話しています。罪を背負っているので、主のおられるエルサレムではない、その外で焼かれなければいけなかったのですが、イエス様もエルサレムから出たところで死なれ

ました。聖墳墓教会にしても、ゴードンのカルバリーにしても、どちらも、当時の城壁から少し出たところに、その丘があります。

そして、「多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ」とありますね。十字架は、丘の高いところにあったような印象がありますが、違います。大通りにあり、目線より少し高いであったかもしれませんが。なにしろ、見世物にするためですから、多くの人にその凄惨な姿を見せなければいけなかったのです。そして、多くのユダヤ人が見たのですから、彼らには言い訳ができなかった。ペテロは、初めの説教で、「あなたがたが十字架に付けた」ということを言った時に、心が刺されたとありますが、彼らも無実ではなかったのです。

それから、第二に、ヘブル語、ラテン語、ギリシア語に書かれていることがあります。これは、ローマのこの地域がいかに重層的になっているか、物語っています。まず、ユダヤ人の中ではヘブル語が使われていました。あるいは会話では、アラム語が使われていたと言われます。ユダヤ人の王として死なれたのですから、これは理解できますね。ラテン語は何でしょうか？ローマの公用言語です。公式には、ラテン語がローマの言語でした。しかし、一般の人々はローマ帝国においてギリシア語を使用していたのです。なぜ、ローマなのにギリシア語なのか？ローマ帝国の前は、長いことギリシア帝国が支配していました。その時に、ギリシアの文化や言語が深く浸透して、ローマに支配が移ってからも、人々はそのままだギリシア語を使い続けたのです。

ここの意味しているところは、隅々まで、どの民族でも、どの言語でも、「ユダヤ人の王、ナザレ人イエス」が伝えられたということです。ヘブル語では、ユダヤ人の間で。ラテン語は、ローマ帝国の中で。そしてギリシア語は、その時代の全ての人々に対して、ということです。天において、教会がイエス様に向かって賛美しました。「黙 5:9 あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、」

<sup>21</sup> そこで、ユダヤ人の祭司長たちはピラトに、「ユダヤ人の王と書かないで、この者はユダヤ人の王と自称したと書いてください」と言った。<sup>22</sup> ピラトは答えた。「私が書いたものは、書いたままにしておけ。」

ここで、総督ピラトが最後に抵抗しています。これまで、祭司長たちの要求に応じていくばかりでしたが、ここではもう十分、お前たちの言うことは聞かない、と要求を払いのけました。このことによって、ピラトは真理を世界に対して証しするのに用いられたのです。イエス様は、ユダヤ人の王と自称したのではなく、事実、ユダヤ人の王なのだということです！

## 2B 兵士のくじ引き 23-24

<sup>23</sup> さて、兵士たちはイエスを十字架につけると、その衣を取って四つに分け、各自に一つずつ渡るようにした。また下着も取ったが、それは上から全部一つに織った、縫い目のないものであった。<sup>24</sup> そのため、彼らは互いに言った。「これは裂かないで、だれの物になるか、くじを引こう。」これは、「彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします」とある聖書が成就するためであった。それで、兵士たちはそのように行った。

十字架の死刑囚たちの持ち物を、死刑を執行しているローマ兵の間で分け合うのは、習慣になっていました。今のように服がどこにでも売っているのではなく、こういったものを売れば、ちょっとしたお金になりました。衣は、四つに分けることができましたが、その下に着ているものは、首から足先まで、体全体を包み込むものだったので、これを切ってしまうと台無しになり売り物にならないので、くじを引いたのです。

そして、こういった細かいことをヨハネも他の福音書の著者も書き記したのは、先ほど読んだ詩篇 22 篇にある言葉、「彼らは私の衣服を分け合い、私の衣をくじ引きにします」が成就するためだったのです。この 19 章全体が、すべて預言者の語っていたとおりにということが言えます。旧約時代の預言や律法を型にして、それで服を作ったら、それがナザレ人イエスだった、という感じです。新約聖書は、旧約聖書に加えた新しい話ではなく、旧約聖書に証しされていたことが、実現したことを証言する書物なのです。ある著名な牧師がこう言いました、「私は、旧約聖書があるから、キリスト者になった。」

## 3B イエスの母 25-27

<sup>25</sup> イエスの十字架のそばには、イエスの母とその姉妹、そしてクロパの妻マリアとマグダラのマリアが立っていた。

共感福音書には、女たちが十字架につけられたイエス様を見ていたことは書かれていますが、そこにイエス様の母、マリアがいたことは記していません。やはり、すぐそばで目撃していたヨハネだからこそ、知られていなかった情報がこの福音書には多いです。これから十字架に付けられているイエス様が母とヨハネに語りかけますが、十字架によって疲弊しきったイエス様の声が、聞こえるほどの至近距離です。先ほど話しましたように、十字架刑は、人々の目線からそう高くないところに、しかも大通りにゴルゴダがあったのです。

<sup>26</sup> イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。<sup>27</sup> それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。



ヨハネは福音書を書くにあたって、マリアのことをとても意識して書いています。第一のしるし、カナの婚礼において、マリアが来なさいと言ったので、イエス様も弟子たちも行きましたが、そこで、ぶどう酒が婚礼の途中で切れてしまいました。マリアがないことを、イエス様に告げると、イエス様が、「2:4 女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」マリアがイエスの母としてのつながりを、ある意味で断ち切られています。そうです、確かにマリアは、イエス様を生む器になりました。しかし、聖霊によってマリアは身ごもったのであり、マリアは、他の人々と変わらない、救い主を必要とする人間なのです。神を父とする、独り子としての神と、マリアはその中に入る、特別な関係はなかったのです。

そして今、ここでも同じです。「女の方」と呼ばれています。主が、神に遣わされ、また神のもとに戻るにあたって、その贖いの働きにマリアは何ら加わっていません。私はヨハネが、あたかも、その後のカトリックの教会における、マリアの特別視を意識しているかのようです。マリアは、使徒の働き 1 章にて、イエス様の昇天後に、弟子たちが心を合わせて祈っている中に、言及されていて、それが最後になっています。「1:14 彼らはみな、女たちとイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちとともに、いつも心を一つにして祈っていた。」ヨハネの福音書には、肉の兄弟たちはイエスを信じていなかったことが書かれていますから、復活してから、初めて信じだと考えられます。

イエス様は近くにいた弟子ヨハネに、母マリアを扶養してくれるように、ここで言いつけておられます。主は、決して肉の家族をないがしろにしておられません。パウロが、テモテ第一の中で、こう書いています。「I テモ 5:8 もしも親族、特に自分の家族の世話をしない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。」

#### 4B 最後の言葉 28-30

<sup>28</sup> それから、イエスはすべてのことが完了したのを知ると、聖書が成就するために、「わたしは渇く」と言われた。<sup>29</sup> 酸いぶどう酒がいっぱい入った器がそこに置いてあったので、兵士たちは、酸いぶどう酒を含んだ海綿をヒソプの枝に付けて、イエスの口もとに差し出した。<sup>30</sup> イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。

イエス様は午前 9 時に十字架に付けられたと言われています。他の福音書には、正午に真昼なのに空が暗くなったことが告げられています。そして、「神よ、神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」という言葉が言われました。そして午後 3 時頃に死なれたと言われます。

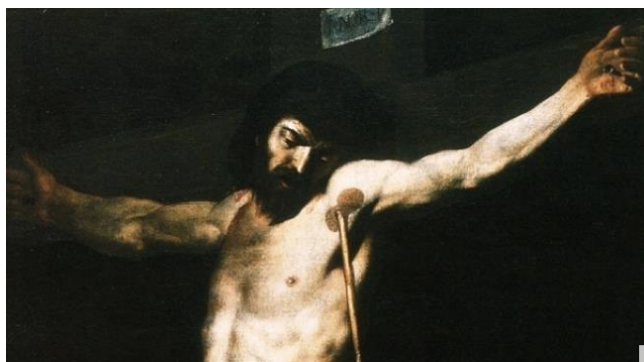
ここで、「完了した」ということばが使われています。これは、ギリシア語で「テテラストイ」です。負債は完済したという意味です。請求書に、テテラストイという印章が押されている用紙が見つかっています。イエス様は、ここで、全ての罪に対する負債を支払ったのだと宣言しておられるのです。ヘブル書の著者は、こう書きました。「5:8-9 キリストは御子であられるのに、お受けになった

様々な苦しみによって従順を学び、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり・・・すべての苦しみを通られて、永遠の救いの源となるように、その従順によって完全な者とされたのです。これをもって、全ての罪はイエス様によって完済され、全く、この方を信頼するだけの救いによって、私たちを完全に救うことができ、永遠に救うことができるのです。その瞬間を今、イエス様は、「完了した」という言葉で言われたのです。

その前にまず、「聖書が成就するために、「わたしは渴く」と言われた。」とあります。「詩 69:21 彼らは私の食べ物代わりに毒を与え、私が渴いたときには酢を飲ませました。」渴いたと言われたら、酸いぶどう酒がいっぱい入った器から、イエス様に飲ませました。これは、体内が全く脱水していたので発した言葉であると同時に、罪によって起こされた渴きと言ってもいいです。ダビデは、罪を犯した時の状態を、渴ききっていることで表現しました。「詩 32:3-4 私が黙っていたとき私の骨は疲れきり、私は一日中うめきました。昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり、骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。」

そして兵士は、「海綿をヒソプの枝に付けて」とあります。ギリシア旅行に行くと、観光客用にいるところで海綿が売られていたのを思い出します。ヒソプですが、過越の祭りで、屠った子羊の血潮を家の鴨居と門柱に付ける時に、ヒソプを使います。ユダヤ人の目には、兵士の使ったヒソプと過越の子羊を重ね合わせたかもしれません。

そして、この「海綿を棒につける」姿ですが、ローマ社会に生きている人は、こんなイメージを抱いたでしょう。便器を洗うためのブラシ、あれを口に持ってこられたイメージです。もっとはっきり言います。ローマ式のトイレ、結構、上級階級の男性たちが使う公衆トイレですが、座るところの目の前に、水の流れている小さな水路があります。それは、まさに水洗のためです。用を足した後のものを流すのではなく、海綿のついた棒を使って、おしりふきにした後、その海綿を洗うためのものです。とことんまで、人を卑しめるための習慣であったのです。イエス様は、私たちのためにこのような恥を受けられました。



そして最後、「頭を垂れて霊をお渡しになった。」とあります。よく見ると逆です、息を引き取ってから頭が垂れます。そうではなく、自ら頭を垂れて、それで意識して霊をお渡しになっておられます。イエス様は最後まで、ご自身で命を捨てられたことを表しておられるのです。イエス様は、皆さんのために強いられて死んだのではありません。なんとうれしいことでしょうか、いやいやながらではなく、仕方なくでもなく、ご自分で自ら進んで命をささげられた、愛しておられるのです。

## 2A 埋葬における成就 31-42

こうしてイエス様が息を引き取られました。この後も預言の成就是続きます。

### 1B 折られない骨 31-37

<sup>31</sup> その日は備え日であり、翌日の安息日は大いなる日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に死体が十字架の上に残らないようにするため、その脚を折って取り降ろしてほしいとピラトに願い出た。

祭りが金曜日にあつて、その翌日の安息日は大いなる日だとあります。普通の時でも安息日は厳守ですが、過越の祭りの大いなる日である、この安息日は、特に重要です。この時に、ユダヤ人たちが見たくないものがありました。「安息日に死体が十字架の上に残らないようにする」ということです。ローマ人は、死体をそのまま放置し、野獣や猛禽に喰わせるようにさせました。非常に惨たらしい光景です。けれども、ユダヤ人にとっては、それが起こることは許されないことでした。「申命 21:22-23 ある人に死刑に当たる罪過があつて処刑され、あなたが彼を木にかける場合、その死体を次の日まで木に残しておいてはならない。その日のうちに必ず埋葬しなければならない。木にかけられた者は神にのろわれた者だからである。あなたの神、【主】が相続地としてあなたに与えようとしておられる土地を汚してはならない。」まず、木にかけられているのは呪われているとみなされました。それで、翌日に持ち越してしまうと、土地が汚されていると主が言われました。そのために、もうすでに午後 3 時で日没が間近であり、日没になったら安息日で何も働いてはいけなくて、大いなる日なら尚更でした。ですから、すぐに取り降ろしたいと願い出たのです。

イエス様は、ここでも預言を成就されています。木にかけられた者は呪われていますが、それは私たちの身代わりの呪いだったのです。「ガラ 3:13-14 キリストは、ご自分が私たちのためにのろわれた者となることで、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。「木にかけられた者はみな、のろわれている」と書いてあるからです。それは、アブラハムへの祝福がキリスト・イエスによって異邦人に及び、私たちが信仰によって約束の御霊を受けるようになるためでした。」主が呪われたことによって、私たちがアブラハムの祝福を受け継ぐことができるようになりました。

そして、十字架に付けられている者の死期を早める方法が、「脚を折る」ことです。放っておくと、数日生きる場合もあります。けれども、すねのところですね、脚を折れば、呼吸をするために踏ん張ることができなくなり、すぐに窒息して死にます。

<sup>32</sup> そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた一人目の者と、もう一人の者の脚を折った。<sup>33</sup> イエスのところに来ると、すでに死んでいるのが分かったので、その脚を折らなかつた。

<sup>34</sup> しかし兵士の一人は、イエスの脇腹を槍で突き刺した。すると、すぐに血と水が出て来た。<sup>35</sup> これ



を目撃した者が証している。それは、あなたがたも信じるようになるためである。その証しは真実であり、その人は自分が真実を話していることを知っている。

ここで寸分の差で、イエス様の脚が折られませんでした。先にご自身で霊を父にお渡しになっていたからです。誰かに命を取られるのではなく、ご自身でいのちをおささげになったのです。

そして、ヨハネが強調しているのは、脇腹をローマ兵が槍で刺して、そこから出てきた血と水です。これを私は目撃したのだ、これは真実なのだと強調しています。これは、イエス様が肉体を持ってこられたことの証拠になるからです。おそらく、兵士が下から上に槍で突き刺したので、心臓を尽くさしたのでしょう。そのため、血のみならず、心膜に溜まっていた水も噴き出たと考えられます。ヨハネは、このことを第一の手紙でも強調しています(5:6)。

使徒たちの時代には、ギリシア系の異端、グノーシス主義がはびこっていました。それは、イエスは仮現であると教えていました。すなわち、肉体を取らないで仮に現れたとしたのです。肉にかかわることは汚れており、霊に関わることのみ神が介在しておられるとしました。こうした肉と霊の二元論がありましたが、イエス様は、まさに肉体を取られて、この騒がしい、罪多き人々の間に住まわれたのです。この私たちの肉体があって、生の生活があってこそその交わりなのです。ヨハネは、第一の手紙の書き出しをそのために、注意深く書きました。「Ⅰヨハ 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」じっと見つめ、自分の手で触ったと言っているのです。肉体を取られた方が、いのちのことばだったのです。

今の時代、新たなグノーシス的な動きがあります。インターネットが生活に定着し、知識が簡単に手に入るようになりました。その知識があることが、そのまま霊的であるとされました。それで、リアルな生活、生の付き合い、そこにこそイエス様がおられるということが軽視される傾向があります。知識を持っているので、そのまま単純に信じている人は、「あなたはまだ分かっていない」と、半分しか分かっていない、無知であるとされます。高慢になっているのです。しかし、ヨハネはそういった者たちを、反キリストであると呼び、イエスは、肉体を取って現れたからこそ、私たちは命を持っており、私たちの交わりは、この肉体を持ってきて初めて成り立っていることを話したのです。そして、イエス様を単純に信じて生きている兄弟たちに、励ましたのです。「Ⅰヨハ 2:20-21 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。」

そして、ここで血が出てきただけでなく、水が出てきたことを強調しているのは、もしかしたら、ユダヤ人は、過越の祭りですから、イスラエルがエジプトを出てから、荒野の旅をしている時に、岩を

打って、そこから水が出てきたことを思い出すかもしれません。岩はキリストを表しています（ I コリ 10:4）。

<sup>36</sup> これらのことが起こったのは、「彼の骨は、一つも折られることはない」とある聖書が成就するためであり、<sup>37</sup> また聖書の別のところで、「彼らは自分たちが突き刺した方を仰ぎ見る」と言われているからである。

この間一髪で、脚が折られることのなかったのは、二つの預言が成就するためでした。一つが、今、話した過越の祭りの成就です。「出 12:46 これは一つの家の中で食べなければならない。あなたは家の外にその肉の一切れでも持ち出しはならない。また、その骨を折ってはならない。」今のユダヤ教の人たちに、「なぜ骨を折っていけないのですか？」と尋ねても、きちんとした答えが返ってこないのではないかと思います。しかし、イエス様を信じるユダヤ人に聞けば、「これは、イエスが私たちの待ち望んでいたメシアなのです。」と答えます。

そしてもう一つが、ゼカリヤ書 12 章です。「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」これは、イエス様が再臨される時の預言です。エルサレムに世界からの軍隊が攻め入ってきて、そこに危機一髪の時に主が救いに来てくださいます。その栄光に輝く、力強い主は、実は、かつて先祖が突き刺した方、ナザレ人イエスであることに気づき、長子を失ってしまって泣いた時のように泣くと言っています。ここで悔い改め、御霊によって清めを経験します。目に見えない神、主が、どのようにして突き刺せるのでしょうか？けれども、神が肉体を取られたからこそ、突き刺すことができたのです。

## 2B 富む者の墓 38-42

そしてイエス様の埋葬に入ります。

<sup>38</sup> その後で、イエスの弟子であったが、ユダヤ人を恐れてそれを隠していたアリマタヤのヨセフが、イエスのからだを取り降ろすことをピラトに願い出た。ピラトは許可を与えた。そこで彼はやって来て、イエスのからだを取り降ろした。

隠れ弟子が、最高法院、サンヘドリンの中に多くいました。他の福音書では、アリマタヤのヨセフは、「勇気を出してピラトのところに行き(マルコ 15:43)」とありますから勇敢な人のように見えますが、ヨハネは批判的に書いています。弟子であることを「ユダヤ人を恐れて」隠していたというのです。確かにそうなのですが、仕方がないのでは？と私は思ってしまいますが、しかし、ヨハネの福音書では一貫して、このことを伝えています。「12:42-43 しかし、それにもかかわらず、議員たち

の中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。彼らは、神からの榮譽よりも、人からの榮譽を愛したのである。」神からどう思われるか気にするよりも、人からどう思われるか気にしていた、ということです。今の言葉でいうと同調圧力、昔からの言葉で言うと村八分です。

人からどう思われるか？ということによって動いていることが、私たち日本人には多いです。これは、ユダヤ人の問題でもあり、生まれつきの盲人が大胆にイエス様を告白するものなら、共同体から追い出されたからです。今でも、もしイエス様を告白するものなら、あなたはもはやユダヤ人ではないと、ユダヤ人なのに言われてしまいます。それで心の中で信じているかもしれないけれども、周りを憚って告白しないということがあるのです。そして、日本の人たちにとってもそうでしょう、家族なり、親族なり、職場なり、他に自分の所属しているところで、自分がイエス様を信じている、クリスチャンだということを言わないでいることが、非常に多いです。しかしそれは、「神からの榮譽よりも、人からの榮譽を愛」することになります。

<sup>39</sup> 以前、夜イエスのところに来たニコデモも、没薬と沈香を混ぜ合わせたものを、百リトラほど持ってやって来た。

ヨハネの福音書にしか出てこない、もう一人の議員がいました。ニコデモです。あの有名な、「新しく生まれなければいけない」とイエス様が語られた人です。彼は夜にイエス様のところに来ましたが、それも、イエス様を信じたいが、他の議員に見られていることを避けていたとも言えます。彼は一度、最高法院、サンヘドリンで異議を述べたことがあります。「ヨハ7:50-51 彼らのうちの一人で、イエスのもとに来たことのあるニコデモが彼らに言った。「私たちの律法は、まず本人から話を聞き、その人が何をしているのかを知ったうえでなければ、さばくことをしないのではないか。」」しかし、主が死なれた後で、アリマタヤのヨセフもニコデモも、ついに表に出るようになります。

ニコデモ、イエス様の埋葬のために没薬と沈香という香料を持ってきました。ユダヤ人の当時の埋葬は亜麻布に巻いて、洞窟とかに安置します。一年ぐらい経ってから白骨化したものを、お骨をとって、骨壺に入れて保管します。そして、また再利用できるのです。イエス様は、再利用されていない新しい墓に葬られたのですが、強調されているのは、普通、再利用されているからです。そこで、遺体を亜麻布で巻く時に、没薬と沈香を混ぜたものを用いながら巻きます。臭いをここで驚くのは、彼の持ってきた量です。33キロほどです。ものすごい大量だし、彼もヨセフと同じく裕福な人であったことを伺わせます。そしてこのような富んだ人たちによって丁重に葬るのが、神のご計画の中にあった、というのが次の話です。

<sup>40</sup> 彼らはイエスのからだを取り、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料と一緒に亜麻布で巻いた。<sup>41</sup> イエスが十字架につけられた場所には園があり、そこに、まだだれも葬られたことのない

新しい墓があった。<sup>42</sup> その日はユダヤ人の備え日であり、その墓が近かったので、彼らはそこにイエスを納めた。

新しい墓は、ヨセフの所有の墓です(マタイ 27:60)。ヨハネは事情を詳しく話していますが、ともかくも時間がなかったので、近くにあるのが、ヨセフ所有の新しい墓でした。墓地ではなく、園の中にある墓でした。おそらく自分自身が葬られるために購入していたのでしょう。それをイエス様に差し出したのです。そして、このことがイザヤ 53 章 9 節の成就となったのです。「彼の墓は、悪者どもとともに、富む者とともに、その死の時に設けられた。」十字架につけられた者たちは、すぐそこに捨てられる穴があり、けれどもそこは富む者の墓ではありません。けれども、すぐそばに富む者の墓があった、ということです。矛盾しているように見える、この表現ですが、イザヤはまさに、このことを示されて、預言に書いたのです。

主は、このようにして、神の御心を果たして死を遂げられました。私たちは、この方の成し遂げられたわざ、完了したわざがあつて、そこに信仰を置き、また告白するだけで、救われるのです。私たちが何か唱えたら救われるということではなく、主がここまで従順に神に従われた、その大いなる業によって救われています。電気をつければ光がつくのではなく、24 時間、365 日、安定した電気を供給する人たちがいるからこそ、ただスイッチを押せば電気がつくように、私たちも大いなる永遠の贖いの業を神がキリストにあつて成し遂げてくださったので、このことを信じ、受け入れ、告白することで救われます。